観光文化

Tourism & Culture

VOL. 190
2008 July

財団法人日本交通公社

特集◎ 里山と観光立県千葉

◆巻頭言

21世紀型観光の舞台、里山　堂本暁子……①

◆特集

- 房総の里山の生物多様性と人々のかかわり　中村俊彦……②
- カントリーサイド・ツーリズム―国際観光資源としての里山景観
  The Satoyama Countryside Landscape as an International Tourism Resource　ケビン・ショート……⑦
- いすみ地域の観光文化 ―いすみ再発見を例に　市原淳田……⑫
- もっと生き生き千葉の里山　金親博榮……⑮
- 里山・里海はみんなのがっこう　遠藤陽子……⑱

◆視点

- 返還四十周年を迎えた小笠原にエールをおくります　寺崎竜雄……㉒

◆連載

Ⅰ　あの町この町　第28回

鳥の休み場 ―青森県・黒石市　池内　紀……㉖

Ⅱ　風土燦々①

輝ける日本人の暮らし＝序幕　飯田辰彦……㉜

Ⅲ　ホスピタリティの手触り 49

旅をしない理由　山口由美……㉞

◆新着図書紹介……㊱

塩の道・千国番所跡

「塩の道」千国街道は信濃松本から越後糸魚川までの約百二十キロメートル(三十里)の険しい道中である。信濃から麻や穀類、越後から塩や干物などの海産物を人の背や牛の背で運んだため「塩の道」とも呼ばれている。戦国の世、上杉謙信が武田信玄に塩を送った義塩の故事による塩もこの道を運ばれたと伝えられる。北アルプスの峰々を眺めながら私も旧街道をカメラを担いで歩いてみると水車小屋や野仏のたたずまいが至る所にあり、名もなき人々の踏み跡が往時をしのばせてくれる。

今回の千国番所跡は長野県小谷村の千国の庄史料館として「塩の道」の歴史を一般公開している。江戸期、千国の宿には一日百駄もの荷が出入りした。したがって松本藩の千国番所は藩役人が出国する女の通行手形をあらためると同時に入荷・出荷を厳しく監視した。その上、越後からの塩や魚をはじめすべての品目と信濃の商人や農民が移出する穀物や麻にも運上金を取り立てた。往時の歴史がしのばれる。

(写真・文　樋口健二)

21世紀型観光の舞台、里山

千葉県知事　堂本　暁子

里山は、人の手が入って豊かになった自然環境である。縄文の時代から日本人は、自然の循環のシステムを活用することに長けていた。里山で薪を採り、炭を焼き、木や竹を切り出して家を建て、家具や農機具を作り、生活の糧を得ていた。しかし、何よりユニークなのは、里山で人と自然の好循環が進んだことで、手を入れた里山には程よく太陽の光が差し込み、下草が繁茂し、昆虫や小動物などさまざまな生き物たちの賑わいの場ができたことである。

春には山菜を摘み、筍を掘り、秋には栗を拾い、アケビを採るなど山の幸に恵まれ、小川で捕る沢ガニやヤマメ、そして森で捕るヤマウサギや野鳥は貴重な蛋白源だったに違いない。里に住む村人にとって里山は裏庭のような存在であると同時に食の宝庫であり、生活文化の源であった。

何千年、何百年と言う歳月を重ねる中で、北にも、南にも、それぞれの地方の地形に、気候に合った里山が、ミニダムの役を果たす棚田が、田圃が作られた。それは日本の原風景であり、日本人の心の故郷である。

我が千葉県はと言えば、高い山がなく、最高峰が標高四〇八メートルの愛宕山である。だから、ほとんどが里山で、その谷間に「谷津田」と呼ばれる独特の水田風景が広がっている。さらに、三方は里海で、その浜を、南からの黒潮と北からの親潮が洗う。昔から貝などの海の幸も食卓を賑わせていたに違いない。

しかし、今、里山の危機が叫ばれている。都市化の進展に伴い、人が手を入れなくなって里山が減り、埋め立てによって里海が減ってきた。

里山が姿を消し始めると人は寂しさを感じ、掛け替えのない自然が少なくなっていくことに不安を抱き始めたのだろうか。これまであまり語られることのなかった里山、里海が急にクローズアップされるようになった。

御宿に茅葺き屋根の農家を使って地元の田舎料理を出す庵がある。日曜日などは八十人もの客が東京から来ると聞いて、私は「そうしてその方たちは何をするのですか」と思わず訊いた。「田圃の畦を、畑や里山の辺りをただぶらぶらと歩いていますね」というのが主人の返事であった。

これまでのように名所旧跡を訪れるのではなく、その人たちは自らの故郷の自然と重ねて、里山や里海に憩いの場を求めているのだろうか。無意識にかもしれないが、今、私たちは里山、里海を訪れて日本人としてのアイデンティティーを確認しているのかもしれない。ふと、そう思えた。

そういえば、週末になると、都会から子ども連れの若夫婦からお年寄りまで、森の散策や虫取り、野外料理など、それぞれの楽しみを求めて里山へやってくる。昔と違った形で人が里山に入るようになってきた。このような流れが荒れた里山を生き返らせるのかもしれない。そればかりか人々は里山に新しい観光地としての魅力を間違いなく発見し、新しい旅の形として広がり始めている。里山文化は奥が深く、自分発見の場でもあるからであろう。

（どうもと　あきこ）

里山と観光立県千葉

三方を海に囲まれて温暖な気候に恵まれ、豊かな自然環境を有する千葉県。昨今、開発や都市化が進み、森林・農地等の緑地が減少、多様な生き物の宝庫である里山の良さが失われるなかで、二〇〇三年五月、他県に先駆けて「里山条例」を制定した。今号では、この千葉県の里山の保全・整備・活用と観光立県に向けたさまざまな取り組みを紹介する。

特集1

房総の里山の生物多様性と人々のかかわり

千葉県立中央博物館副館長　中村　俊彦

はじめに

日本列島のほぼ中央に位置し、太平洋に突き出た房総半島は、三方を海に囲まれ、温暖な気候と肥沃な土壌条件にも恵まれ、極めて豊かな自然環境を有している。この恵まれた房総での人々の生活は約四万年前の旧石器時代にさかのぼる。縄文時代には、豊かな海の幸を中心に当時としては極めて多くの人が暮らし、たくさんの貝塚も作られた。弥生時代には稲作が広がり、自然に育まれた房総での人々の生活・生業は、自然を壊すことなくむしろ自然本来の力を上手に引き出すものであった。このような人々の暮らしと自然とが一体となった空間は、里山（里やま）・里海（里うみ）と呼ばれ、そこには人の生活・文化とともに多様な生物・生命のにぎわいとつながりが育まれていった。

豊かな房総半島の自然と動植物

房総半島は、北部と南部ではその気候や地形、そして植生についても大きな違いが見られる。北部は標高二〇～八〇メートルの洪積台地と沖積低地で覆われ、台地に低地が樹枝状に入り込む谷津地形が多い。一方の南部は丘陵地形が広がる。その最高は愛宕山のわずか四〇八メートルであるが、しかし、丘陵を形成する比較的柔らかな基盤は急峻で谷深い地形をもたらした。

房総半島の沖合では暖流の黒潮と寒流の親潮がぶつかり、東京湾外湾の勝山沖には世界最北限の造礁サンゴが見られ、そこ

にはチョウチョウウオやクマノミといった熱帯魚が生息する。また冬には利根川をはじめ九十九里の河川に南限のサケが遡上する。さらに陸域において房総半島は、中国南部に端を発する常緑広葉樹林（照葉樹林）帯の北限域に当たるが、北部や丘陵地域には落葉広葉樹林（夏緑樹林）も多い。千葉県で名産の果樹として、ナシとビワが挙げられる。両方ともバラ科に属しナシは冷温帯性の落葉広葉樹であり、一方の房総南部で栽培が盛んになっているビワは暖温帯性の常緑広葉樹である（図1）。このように房総半島・千葉県は、世界の北と南の動植物が出合う極めて豊かな生物多様性が存在する。

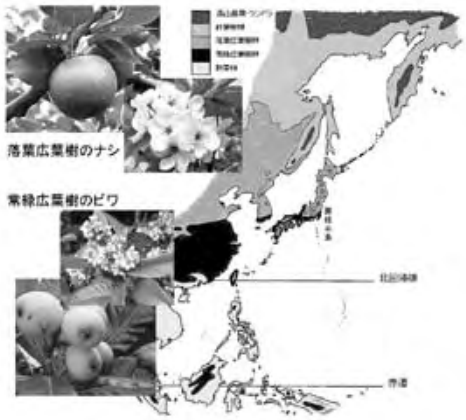


図1：房総付近の植生帯と、房総名産の落葉広葉樹のナシと常緑広葉樹のビワ

里山とは

「里山」は、もともと、まきや炭、また肥料や燃料用の落ち葉、そして山菜・キノコ・薬草、さらに木材などを得るために人が管理する人里近くの農用林のことであった。江戸時代には全国各地に里山の記述が残されている。佐賀藩の一六六一年の資料『山方二付テ申渡条々』において「里山の土地」という意味で「里山方」が登場する（佐賀県林業史編さん委員会編、佐賀県林業史、一九九〇）。また、加賀藩一六六三年の『改作所旧記』では、里山の巡回役として「里山廻」の記述が見られ（山口隆治、加賀藩林野制度の研究、二〇〇三）、そのほかにも秋田藩や名古屋藩でも、里近くの山として「里山」の記述が見られる。

写真1：房総半島北部で特徴的な谷津田の里山

しかしながら最近では、この農用林すなわち「里山林」だけでなく、さまざまな森林や田畑、川沼、草地、さらには集落までも含む伝統的農村の自然環境全体を指す言葉として用いられてきている（写真1）。すなわちこれは人々の生活・生業が作り出した多様な環境（土地利用）のモザイクセットであり、広義の「里山」すなわち「里やま」「里山自然」と言える。

トキやコウノトリも生息する生物多様性の宝庫

日本では絶滅してしまったトキであるが、

写真２：旭市に飛来し越冬したコウノトリ（2006年12月）

現在、中国産のトキが佐渡のトキ保護センターで飼育・増殖がなされ、野生復帰の研究が続けられている。日本と同じようにかつて絶滅しそうになった中国では、保護活動により、現在、陝西省に約五百羽の野生のトキが生息しているとのことである。実はこのトキ、千葉県が日本の太平洋側での最後の記録地となっている。一九四八年と五三年には現在の市原市五井にトキの飛来記録が残されているが、そのほか手賀沼にも記録があり、また県内には鴇（トキ）崎や鴇谷、また鴇ヶ峯といった地名や鴇田、鴇矢、鴇崎といった名字も多い。

私は、トキを描く日本画家の時田直善さんにお目にかかったことがある。時田さんはかつて五井に飛来したトキを目撃され、その時の様子など、トキの作品を約二十点発表された。かつて時田さんから直接お会いして伺った話では、千葉に飛来したトキは、蓮田に群れ、盛んにタニシや小ブナを食べていたとのことであった。トキは森林に巣を作り子育てする鳥であるが、その餌はタニシやドジョウなどの水生生物である。したがって、雑木林と田んぼのセットはトキにとっても最高の生息条件であり、中国の野生のトキの生息地もまさにこのような里山自然の所である。

トキと同じように絶滅が危惧されたが、保護・増殖活動によって野生復帰され大きな話題となったコウノトリも、田んぼの水生生物等を餌とする、いわば里山の鳥である。実はこのコウノトリ、現在でもしばしば千葉県に飛来する。二〇〇四～〇五年には我孫子市と長柄町で各一羽ずつ、また二〇〇六～〇七年には旭市と富津市でやはり各一羽ずつ飛来し越冬した（**写真2**）。房総の里山は、コウノトリにとっては今なお重要な生息地に違いない。

私たちが子供のころは、どんな都会の中にも田んぼや雑木林があり、そこでメダカやカエルを捕り、ヘビやキジに出会えたものである。子どものころの里山での生物・生命との触れ合いは、遊びの中に多くの学びもあった。

稲作のために作られた田んぼであるが、田やあぜ、水路やため池などは、自然そのものよりむしろ水環境や遷移条件の多様性を向上させた。森林・林地においても里山林は、生産と結びついて管理された広葉樹の雑木林や針葉樹の人工林、竹林や鎮守の森まで、さまざまなタイプが存在する。これら森林・林地や田畑、また川沼、草原から集落も含め、里山には多様な環境のモザイクが創出され、この空間的構造は、野生の動植物の生息・生育環境の多様性を増しつつその連続性を保ち、多くの種の存続を担うる結果となっている。

春の七草や秋の七草で昔から日本人に親しまれた草花の多くは、かつて氷河期に中国大陸から朝鮮半島を経て日本列島に分布を広めてきたものと考えられているが、それは農業管理でつくられる草原的な植生環境に依存し今に伝えられてきた。動物相に

おいても伝統的な農村自然の里山と深いかかわりを持つ種が多い。ヒキガエル等の両生類の多くは、春の卵からオタマジャクシの時期を水田や水路で生活するが、成体になれば水辺や周辺の雑木林に移動し、その生活史は農作業と調和したものである。また日本人なら誰でも親しんできたカブトムシであるが、その幼虫世代の生活はほとんど農家の堆肥場に依存している。いずれにしても、伝統的農村・里山自然に依存する野生生物は極めて多い。

自立・循環する里山海の生態系

かつての日本の人家のほとんどでは家禽（かきん）や馬などの家畜が飼われ、隣接して水田や畑がつくられた（図2）。水田と畑は食糧生産のために高度に人為制御された土地であった。そして、その周辺には、田畑での生産を支えつつ、資源獲得の場として機能する池沼・河川をはじめ草地・林地が配置された。これらは田畑などに比べれば低度な人為制御の土地と言える。さらにその外には、広大な海や深い森林など自然そのままの、ほぼ人為的には無制御な土地空間が広がっていた。

日本の里山自然には多種多様な資源が存在する。田畑の栽培作物など人がそのまま生活に利用する直接資源、また、一旦田畑などを経由して利用される間接資源、さらに人家からの糞尿・廃物については、肥料として高度および低度制御地等によって資源化される還元資源もある。

常に人為管理される田畑のような高度制御地に対し、低度制御地は、適度に人為が加えられ管理される二次的自然の地である。陸域環境として草地や林地、水域環境としては池沼・河川等が存在する。草地は茅場（かやば）や秣場（まぐさば）として、また林地は、まき・炭や木材、山菜、落ち葉等さまざまな直接および間接資源がここから得られる。かつて水田では、米とともに、魚介や野草等の多様な副産物も採集されていた。また池沼・河川に干潟や磯の水辺の低度制御地は、水資源の確保や治水機能のほか、多様な魚介類の食料から医薬、そして肥料材料等が得られた。さらにここは治水・治山や防風・防潮等の防災措置が施され、自然災害を軽減するための緩衝地帯としても重要な役割を果たしていた。

森林と海の無制御の土地空間は、人々にとっては時に自然災害の発生源であるとともに、一方では自然資源の供給の源でもあった。また人為制御の及ばないこの空間に対して人々は、自然を畏れ敬う「畏敬」の場であり、また信仰の対象として大きな存在でもあった。里山に対する奥山あるいは深

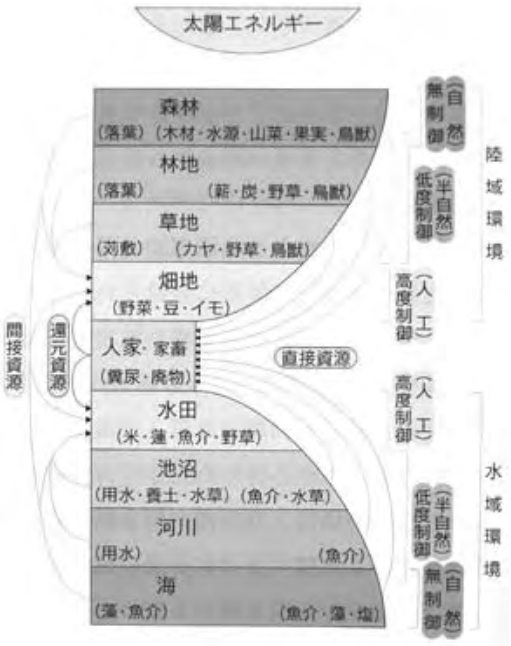


図2：里山海（里山・里海）の景相と資源の利用および循環

山もこの無制御空間であり、心理的距離の大きな空間でもあった。

集落を中心とする高度制御地から低度制御地、そして無制御地のゾーニングのセットは、かつての日本の村一つの領域と重なる。この空間と人々の暮らしのユニットは「景相単位」として、そのゾーニングおよびモザイク的構造とこれによってもたらされる食料・燃料等の資源の供給、さらにその廃物も領域内で循環させる、いわば資源・エネルギーの自立・循環の機能をもたらした。この景相単位は、村社会の人々の助け合う仕組みや文化・信仰とも大きくかかわり、その社会的安定性は、人・自然・文化が一体となって調和・共存するサステイナブルな里山生態系の前提であった。

里山の保全とサステイナビリティーの発信

首都東京に隣接する房総の里山は都市化の進展や宅地化等が進むなか、大きく変容した。また残された里山においても近代農業による農薬散布や土地改良、さらに米や木材価格の低迷や農林業従事者の高齢化等によって里山林の利用・活用も停滞し、荒廃が進行している。里山が放置されることにより、林地の常緑広葉樹林化、竹林の荒廃と拡大が進み、それに伴う林地の林床植生の貧弱化や二酸化炭素吸収力の低下、病害の多発化、生物多様性の低下なども著しい。

最近では、地球温暖化に伴う森林や生物への影響も顕在化している。耕作放棄地や放棄林をターゲットにしたごみや産業廃棄物の投棄、外来種の侵入や野生鳥獣による農業被害等と、里山の自然環境および地域社会の衰退は急速にその素晴らしさを減衰させている。

このような状況を踏まえ、千葉県では、生物多様性の専門家である堂本暁子知事のもと、二〇〇三年五月に「千葉県の里山の保全、整備及び活用の促進に関する条例」、すなわち「里山条例」が制定され、また二〇〇八年三月、県レベルでは全国初の「生物多様性ちば県戦略」が策定された。県戦略の中にも大きく盛り込まれた里山、そして里海や里沼の保全・再生であるが、その重要性は、今、国内はもとよりアジア、そして世界からも注目されつつある。国においては環境省が、人と自然の長いかかわり合いの歴史を有する日本やアジアの里山・SATOYAMAをモデルとして、人と自然の共生および生物多様性保全と持続的な利用のあり方を提案する「SATOYAMAイニシアティブ」を提唱している。

洞爺湖でのG8サミットでは、世界の環境問題や地球温暖化についての課題が大きなテーマとして掲げられたが、生物多様性については、二〇一〇年に愛知県名古屋市において生物多様性条約締約国会議（COP10）の開催が決定している。そしてこの会議での報告を目指した「里山・里海サブグローバル評価」の国際プロジェクトが国連大学高等研究所を中心に立ち上げられた。堂本暁子知事がこのプロジェクトの最高議決機関、評議会の委員として就任し、私も学術的評価を担当する科学評価パネルの一員として参加しているが、このプロジェクトにおいても千葉県の里山・里海は世界に向けたサステイナビリティーのモデルとして注目されている。

（なかむら　としひこ）

〈参考文献〉
岩槻邦男・堂本暁子編（二〇〇八）『温暖化と生物多様性』築地書館
中村俊彦（二〇〇四）『里やま自然誌』マルモ出版

特集２

カントリーサイド・ツーリズム――国際観光資源としての里山景観

The Satoyama Countryside Landscape as an International Tourism Resource

東京情報大学環境学科教授　ケビン・ショート

カントリーサイド・ツーリズム

「わー、なんて奇麗な景色！」

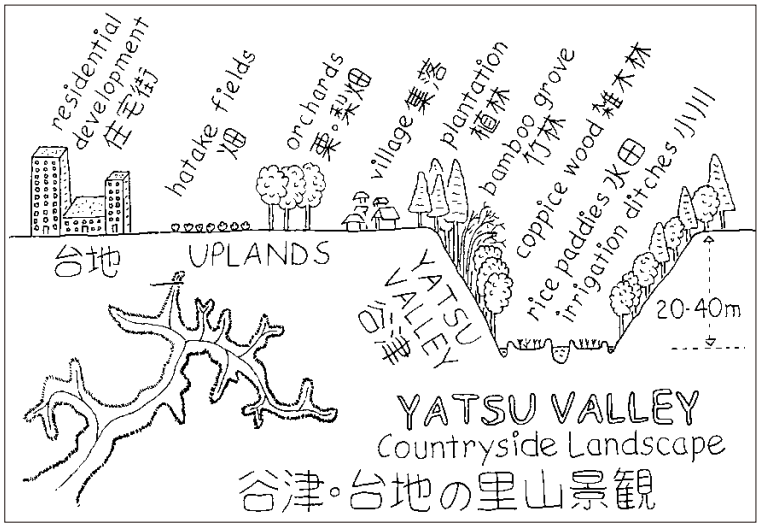
成田空港に着陸する飛行機の窓側に座った乗客は思わずこうつぶやく。

窓から見えるのは、優雅な山脈やうっそうとした原生林ではなく、畑、雑木林、田んぼ、小川、池や集落などが複雑な形で交ざり合う千葉県の里山カントリーサイド。海外から日本を訪ねる旅行者にしても、海外から帰国する日本人にとっても、表玄関でお迎えしてくれるのはこの里山景観だ。

初めて日本を訪ねる来客者にとって、この里山風景は日本の第一印象になる。特にアメリカやヨーロッパの人たちにとって、田んぼを中心としたRice Paddy Countryside Landscape（ライス・パディー・カントリーサイド・ランドスケープ）の初めてのイメージとして心に深く残る。しかし、「久しぶりに海外から帰国したとき、この風景を飛行機の窓から見て、〝やー、ふるさとに戻ってきたなー〟と感動した！」などの言葉は日本人からもよく耳にする。やはり、日本人も自分の国の里山景観に深い親しみを感じている。

しかし残念ながら、多くの人たちは、あの飛行機の窓からの一目が最後で、その後、千葉の里山景観を体験したり楽しんだりする機会はほとんどない。これはほんまにもったいない！

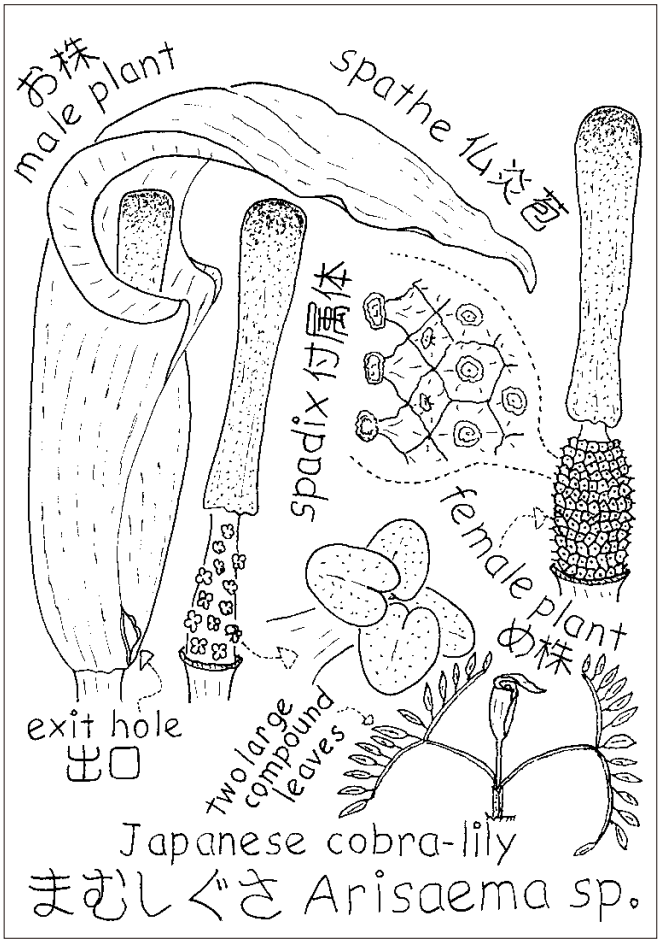
ある国や地域のカントリーサイド・ランドスケープというのは、その独特な地形や植生などの自然条件と、歴史や暮らしなどの文化が融合して生まれて



南関東を代表する谷津・台地の里山景観

くる。日本の里山カントリーサイドは、豊かな四季の変化に恵まれた美しい風景だけではなく、多様な植物や小動物を育む自然環境でもあるし、また、その地域独特な歴史、暮らし、食文化、精神文化、芸能文化などの宝庫でもある。よく探すと、人間が自然と共生できる知恵と知識も里山カントリーサイドの中に見つかる。

この里山景観こそ、日本の最大の国際観光資源だと思う。現在、観光名所巡りだけではなく、その目的地の自然や文化について深く学べる旅行体験が求められている。カントリーサイドは、最高級のエコツーリズムと文化ツーリズムの組み合わせによって、この知的旅行のニーズにぴったりと応えることができる。農村などに滞在する体験ツアーもこの Countryside Tourism（カントリーサイド・ツーリズム）の一つであるが、多くの人たちが気楽に楽しめる観光として、Country Walking（カントリー・ウオーキング）の潜在能力も大きい。今やウオーキングは健康を管理する運動として注目され、「歩き学び」を提供するカントリー・ウオーキングは、健康と好奇心の両方のニーズに応えられる。



雑木林の中で生える野草の種類も、里山の豊かな生物多様性の一部

カントリーサイド・ツーリズムの宝箱――日本

ぼくは、三十年近く日本に住んでいる。ちょっと自慢になるが、日本のすべての県に少なくとも数回は行っている。しかし、何年日本にいても、何回地方に出かけても、飽きるということは全然ない。なぜなら、日本は小さな国（少なくとも、アメリカ人のぼくにとっては小さい！）でありながら、地域ごとの自然と文化はとてもバリエーションが豊かである。そして、自然と文化の結晶である里山カントリーサイドにもまた、豊かな地域バリエーションを楽しませてくれる。

充実したカントリーサイド・ツーリズムの基本は「知れば知るほど面白くなってもっと知りたくなる」ところにある。日本の里山カントリーサイドは、世界に誇れる自然環

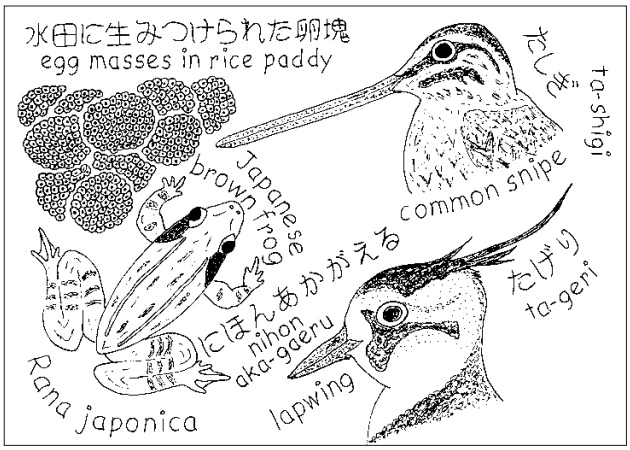
境と文化景観を持ち、来客者の好奇心や想像力を刺激する学びのネタが数多くたまっている。

千葉県から始まる日本の国際カントリーサイド・ツーリズム

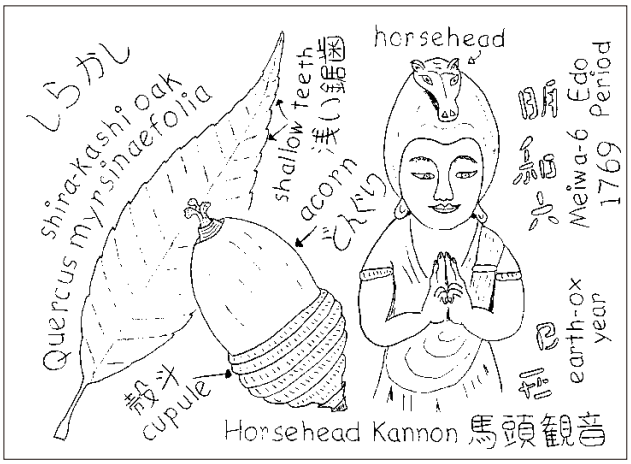
日本のカントリーサイド・ツーリズムの発展は「飛行機の窓から見たランドスケープについてもっと学びたい」という気持ちから始まってよいと思う。実は、この里山景観は南関東独特の「谷津・台地」の代表作でもある。平らの高台に「谷津」という細い谷間が切り込まれ、里山カントリーサイドとして決してスケールは大きくないものの、田んぼやため池、小川などの水辺環境と、コナラ・クヌギの萌芽林（雑木林）、竹林、クリ畑、植林など、さまざまな里山的な森林環境がそろっている。利根川沿いや印旛沼、手賀沼などには豊かなMarshland Countryside（水を中心とした独自の自然と暮らしを育んできた、沼や沖積平野など洪水を受けやすい湿地タイプの里山景観）も見られる。古墳群や縄文貝塚、お城の跡、成田山と成田街道など、歴史的なロマンも豊富。また、多様な伝説、民間信仰などの精神文化や獅子舞などの芸能文化も楽しめる。里山を通して日本の自然、歴史、文化を学ぶのにジャスト・ライト。

この地域の里山のもう一つの大きな特徴として、アクセスの良さがある。東京と成田の間に位置して、どちらからもアクセスが便利。多くの日本人と来客者にとって気軽に接触できる。例えば、成田空港のすぐそばで、ターミナルビルまたはホテルから歩ける距離のカントリー・ウオーキング・コースなら数時間あればOK。JR線、北総線、京成線などの駅から出発するコースは半日から一日しかかからない。

空港と首都の中間に位置するこの地域は、PR活動や情報発信も進みやすい場所である。例えば、空港ラウンジで里山の魅力を分かりやすく紹介するDVDやパネル展示のほか、餅つきのデモンストレーションなど



田んぼという空間は、稲を育てる農地でありながら、色々な生き物にとってなくてはならない繁殖地や餌場でもある



豊かな精神文化も里山ならの魅力

も面白いと思う。さらに、この地域に、房総半島をはじめ日本各地のカントリーサイドの情報などを発信する「里山情報センター（仮称）」の設置も提案したい。センターを通じて、各ホテルや鉄道会社、小売業などが独自のＰＲ活動や里山を紹介することで、住民や行政、企業を結ぶパートナーシップの枠組み作りと情報発信基地にできるのではないだろうか。

カントリーサイド・ツーリズムの発展

カントリーサイド・ツーリズムをスムーズに発展させるためには、ハードの整備とソフトの開発の両方が必要だ。コースの設計、道路標識、安全確保など。またはビジター・センター的な建造物もあればよい。しかし、カントリーサイド・ツーリズムの質を決めるのはインタープリテーション（解釈）となる。メディアはコース沿いの常設パネル、またはガイドブックやガイドマップなどの印刷物。もちろん、充実したインターネット情報も絶対必要。今までの経験から言えば、インタープリテーション解釈は最初から日本語と英語のバイリンガルで進めればよいと思う。例えば、今年の里山シンポジウムで使った萌芽林の仕組みや生態を紹介するバイリンガルパネル、または去年の秋に行った雑木林の林縁に生える植物を中心に「実りの秋」のバイリンガル展示も、外国人だけではなく、英語好きの日本人にも好評だった。解釈は後で中国語、韓国語、タイ語などの節も加える。

カントリーサイド・ツーリズムの内容として、里山景観の自然、歴史、文化を、幅広くなおかつ奥深い形で紹介しなければならない。例えば、あぜ道の野草、雑木林の樹木、田んぼのトンボや野鳥などの自然や生態はもちろん、コナラ・クヌギの萌芽林などの伝統的な土地管理を通して、持続可能な資源利用や物質の循環など、暮らしの知恵も紹介できる。村人の暮らしと文化

雑木林のバイリンガルパネル

と自然の相対関係が、カントリーサイド・ツーリズムのメイン・テーマだと思う。また、水神信仰や子安信仰など、民間信仰のレベルの精神文化においては宗教的な違和感が一切ない。逆に、その精神文化の中に埋め込まれている人間と自然の共生を素朴にアピールする宇宙観は世界中の人たちに魅力を感じさせると思う。

広がるカントリーサイド・ツーリズム

ここで考えているカントリーサイド・ツーリズムは、広い意味でとらえて、当然、農村だけではなく、漁村、山村、山間地の村とその周りの自然も含まれる。例えば、日本の漁村は海に面した港だけではなく、集落の周りにはいろいろな森林と畑、みかん畑などの農地もよくある。この海岸と背後地を含めた総合的な景観 Coastal Countryside Landscape（これはぼくの造語だが、日本語の「里海」の英訳としていいかもしれない！　だって、日本語の「里海」も新しい言葉だし）も里山と同じように、人と自然の相対的な影響から生まれてくるもので、観光資源としての価値が高い。

千葉県の北部から出発するカントリーサイド・ツーリズムは、県全体、そして全国に広がる。国のレベルでも、環境省のＳＡＴＯＹＡＭＡイニシアティブ、または農村景観保全や漁村・都市交流など農林水産省の各事業、国の基本コンセプトである「美しい日本」や「VJC（ビジット・ジャパン・キャンペーン）」にも盛り込みやすいと思う。

カントリーサイド・ツーリズムと環境教育

カントリーサイド・ツーリズムを成功させる第一条件として、対象地の地元住民の積極的な受け入れが挙げられる。このような観光の最高の形は、地元住民といろいろな所から学びにくる来客者との間のインターアクションにあるから、地元の参加なしには成り立たない。カントリーサイド・ツーリズムのインフラは住民対象の生涯教育と地元の学校教育にも大きく貢献できる。

カントリーサイド・ツーリズムと里山カントリーサイドの保全

カントリーサイド・ツーリズムは、他の観光体験と違って、対象地は公園や指定施設だけでなく、実際に暮らしのある Working Countryside（現役で土地の所有者により利用保全される里山）も含む。もちろん、良い状態で保全されている里山こそ対象地として質が高い。現在、千葉県をはじめ、全国的に里山カントリーサイドが急ピッチで変わりつつある。里山の保全は実に複雑で難しい課題である。自然と文化に優しい里山管理は、経済性や労働力から見ると効率が低いというジレンマがあるためだ。生産はビジネスであり、生産者にとって不利な選択を要望することはできない。このジレンマの抜本的な解決には、「自然と文化を守った方の土地、水面や資源（森林、水産）などの利用管理こそ、生産者にとって最も有利な選択である」という社会・経済・行政システムが絶対条件である。残念ながら、今の日本にはそのシステムがまだ確立されていない。もちろん、カントリーサイド・ツーリズムだけでは日本の里山保全の問題をクリアすることはできない。しかし、里山に対しての意識や理解を広めて、または地域の生活をより豊かにして、集落の活性化につなげていくことができれば、里山の保全に貢献することもできると思う。

（ケビン・ショート）

特集３

いすみ地域の観光文化――いすみ再発見を例に

行元寺　住職
市原　淳田

はじめに

行元寺（ぎょうがんじ）は、千葉県南部（旧・上総国）、いすみ市の里山と田園に囲まれた静かな寺である。この地域は、豊かな自然の中に太古からの人間の暮らしが息づき、古事記・日本書紀の時代から中央との交流があり、多くの歴史的伝承が秘められている。

地勢的には、なだらかな里山とヤツデの葉の形をした狭い谷（谷津田）で形成され、東側は豊饒な外房の海に面している。この地域の谷津田は粘土質土壌で良質な米が収穫できたことから、古く大和朝廷時代に朝廷直轄地であることを示す屯倉（みやけ）が置かれた。現在の谷津田は耕作放棄地が目立つが、当時の稲作は谷津田から始まり、人々は里山を背にして住んだ。農耕中心の時代の暮らしは里山とともにあった。

当寺は、山号を東頭山（東国最初の開山の意）と称し、八四九年に現大多喜町に建立されたが、戦乱により焼失し現在の地に移建された。谷津田に恵まれたこの地は農耕が盛んであり、人口も多かったことが想像される。

いすみの歴史と文化

収穫された米や外房の海産物は、馬に乗せ貢物として朝廷へ送られた。

このため、馬の飼育が盛んになり、やがて鐙（あぶみ）や鞍（くら）など馬具を製造するための製鉄技術が発達した。当時は、海岸にある砂鉄と里山の薪炭を利用した製鉄が行われた。その製造技術は、やがて高度な芸術へ昇華した。鎌倉大仏を鋳工した大野五郎右衛門は、同じ上総国（現・木更津市矢那）の出身である。このように、当地域は中央とのつながりが深く、名高い高僧も幾度となく招かれ夢窓国師も当地に約五年滞在した。また、日本絵画・狩野派の始祖「狩野正信」は、この地で生まれた。

当寺にも歴史的に貴重な文化遺産がある。本堂には、徳川家御用彫師「高松又八郎邦教」の彫刻作品が残されている。又八は、江戸城改修工事に彫り物棟梁として活躍し、歴代将軍家の霊廟などに彫り物を残したが、それらは、戦災などにより消失し、当寺の彫刻が唯一の残存作品といわれている。なぜ当寺に残っているのか。時の行元寺住職・亮運（厳海）は幕府の信頼厚く、三代将軍家光の師を務めたことがあり、これを縁として五代将軍綱吉が又八を当寺に遣わし彫らせたのである。岩絵の具を駆使し、漆や金箔などをかみ合わせた優雅な色彩が豪華絢爛な桃山文化の雰囲気を今に伝えている。

また、客殿には、「波を彫らせたら天下一」といわれ、『波の伊八』の異名で知られる宮彫師「武志伊八郎信由」（鴨川市出身）の作品である三面の欄間彫刻が残されている。この中の一面に『波に宝珠』という作品（写真参照）がある。当寺が伊八に彫刻を依頼した時、又八の作品を見て感動し、触発されたのであろう。伊八は太東岬の荒波に馬を乗り入れ、波濤を真横から何度も観察したらしい。波がまさに崩れんとするその一瞬を見事に表現したこの作品は、葛飾北斎に大きな影響を与え、北斎の傑作『富嶽三十六景 神奈川沖浪裏』のモチーフになったといわれている。

伊八の作品は当寺のほか、飯縄寺など千葉県南部に残されており、その迫力は今でも色あせていない。

観光と里山再生

「里山再生」の声を聞いて久しく、この間全国各地で多彩なイベントが催されてきている。炭窯作りから炭焼き体験、森の遊具、里山の学校などいろいろだ。

近年、「定年帰農」や「定年就農」が話題になっており、これらの方々によって耕作放棄地での米作りが各地で試みられている。私は、このいすみの地で収穫される「いすみ米」は、日本一を誇るに値する味で、生産者が自信を持って売ることができると思う。里山に囲まれ、米のおいしいこの地だからこそ、定年帰農者・就農者も、ここで米作りを本業にし、ほかに里山の間伐や整備、大工仕事などの副業を持つことができる。里山にこそ希望があり、懐かしい未来がある。

ほかにも、里山の活用法のひとつに「森林療法」がある。森林浴がさまざまな病に効果があることは、昔から識者によって唱えられている。加えて、この地は天然ガス、そしてヨードにかけては日本有数の生産地である。鉱区権は企業にあるものの、支障のない範囲でこれらを観光に利用できないものか。例えば、天然ガスを使って、ガス灯で市内を照らしてもよい。ヨードはヨード水にして、病気の治療やリハビリ、今はやりの足湯などに利用してもよいだろう。こうした資源の活用をすることで、この地域を首都圏からの滞在型リゾートにしてもいいだろう。自然と一体になった地に足の着いた観光事業になるのではないか。

繰り返しになるが、いすみ米は最高の味だ。食を通して里山を再生し、実際に歩いてみて古代から眠っている歴史や文化の再発見に努めるべきであろう。このほど行わ

武志伊八郎信由作「波に宝珠」

行元寺の山門

れた「ちばデスティネーションキャンペーン」（注）もここに狙いがあった。

この観光キャンペーンで連日多くの観光客が訪れるようになるまで、里山に抱かれひっそりたたずむこの寺に貴重な文化財があるということを、近隣の住民すら知らなかった。まさに地域住民にとっても地域の再発見であった。このいすみ地域に、全国に誇れる文化的観光資源があることを住民自身が知り、この地域に誇りを持つことができるようになったことが、最大の成果であったと私は思う。

おわりに

私は、このいすみ地域に住んで、ここには唯一、日本一のものがたくさんあり、どこに出しても評価されるものがたくさんあると思っている。これからも、大いにこの地域、この里山を誇りにして、その素晴らしさを発信していきたい。

この地域も過疎化が進み、その流れは止められないかもしれないが、観光客などの交流人口が増えれば、地域にも新たな活気が生まれるであろう。そのためには、地域の住民が現代の語り部となって、その土地の歴史・文化に誇りを持ち、外部へ発信し、ガイドしていく必要があるだろう。文化遺産を旗印にすれば、里山のブランド化は間違いなく、より活性化し、観光力のアップになると信じている。

（いちはら　じゅんでん）

（注）二〇〇七年二月から四月にかけてJRと千葉県がタイアップして実施した大型観光キャンペーン

特集４

もっと生き生き千葉の里山

ちば里山センター会長
谷当グリーンクラブ主宰
金親　博榮

「なりわい」へのいざない

六時起床。今朝の田んぼは、霧がかかって、辺り一面がうっすらと見える。高い湿度のせいか、深呼吸すると胸がしっとりとしてなぜか落ち着く。私の住む谷当（やとう）町は、千葉市の東辺部、佐倉市と四街道市が接する農村、一面に広がる田の緑のじゅうたんに囲まれた里山景観の真っただ中にあります。新聞に目を通し、それから朝食。しかし、わが家のこれからは、よくある農家の暮らしとは少し違います。妻と、スタッフのＩ君との今日のスケジュール打ち合わせ。じきにパートのＳさんが出勤。今日も忙しい里山での「なりわい」「わたしの田舎・谷当工房」の一日の始まりです。

田舎暮らしとはいっても谷当町は、都会の隣、スニーカー気分の里山公園とも言える、名付けて「通い型・田舎暮らし」のスポットです。千葉県内、どこにでもある田んぼと森、畑と、ちょっとずつ固まった民家が集落を形成する、モザイクのような典型的な里山です。こんな空間にあなたをお招きしたいのです。

森林の見直し

こんな里山が今、そこらじゅうで消滅してしまいそうです。ヒトは森から発生した生物であり、太古からの進化の過程で、森での記憶がＤＮＡに刻まれ、ヒトの生息の根幹を形作っているといわれます。古代の都市の滅亡は、森を消滅させてきた歴史と深くかかわっているとも聞きます。

この数年、日本でも、とみに森林の大切さが取りざたされるようになってきました。地球温暖化の大きな要因のCO_2の吸収源としての樹木の炭素固定機能が注目され、今さらながら、森林林業の再興に力を入れなければならなくなったからです。京都議定書による目標削減率六％のうち三・八％を森林が担うということにしたわけですから大変なことになりました。

これまでの森林の扱いは、言ってみれば「どうでもよい」ものでした。加工貿易立国日本としては、工業製品の輸出環境整備に、農林産物、特に木材輸入の自由化を早々に選択しました。その結果、木材の自給率は二〇％を切るほどとなり、伐採・搬出コストを賄えない山からは、材木は出てこなくなりました。再生産のサイクルの五十年という長さが、工業製品、農産物と大きく異なる森林は一度下降線をたどると、回復に時間がかかります。日本の樹木の蓄積量は増加の一途にあり、当面は外国の木材を買えるだけ買って、輸入ができなくなったら温存しておいた国産材を使おうという皮肉な見方さえ生んでいます。

ケビン・ショートさんのご案内で東京情報大学内の里山見学

生命を育む里山の変遷

森林の持つ多面的機能が取り立てていわれるようになってから二十年ほどが経過し、森はまさに、ヒトの生命の源であったことが科学的にも解明されつつあります。森に入ると気持がいい、なんとなく伸びやかになり、動きたくなる。心が安らぎ、優しさが募る。緑に囲まれた食事はおいしく、食欲も増す。酸素の供給、木材の生産に加え、水源涵養、水質の浄化、土砂崩れなどを防ぐ国土保全などさまざまな機能も認識されてきました。

元来、里山の自然は持続的なものであり、それを支えてきたものは、人手の介入でした。人が入り、自然に任せて移り変わっていく天然の摂理を、適度に撹乱し、ある一定の状態を保ち続けることが里山保全の原理です。自然に帰るといっても二通りあるわけです。ナチュラリストのケビン・ショートさんはこれを、「縄文自然」と「弥生自然」と呼んで、里山のイメージを分かりやすく説明してくれます。

この日本の里山に一番肝心なヒトたちは、高齢化が進み、人口が減り、「弥生自然」を守る一番大事な要素が欠けてきたわけです。都市への集中で置いてきぼりにされた里山は、「縄文自然」に帰りつつあるというわけです。ヒトを頂点とする生命の連鎖は、「弥生自然」が格段とにぎやかで、複合的です。そんな意味からも、千葉の自然の根幹である里山自然を元気なものにしていかなければ日本の未来はありません。

千葉の里山のハンディ

ところで、千葉県の山林は、比率は全国の半分以下、田畑、市街地などがおのおの三分の一を占めます。小規模所有の民有林が九割、所有者は農業と林業の兼業が一般的であり、山で生計を立てている所帯は現在は皆無となってしまいました。県土は平坦で、平均標高は四十三メートルと全国で一番低く、林業（木材生産）離れ、林地（山林という地目の土地所有）離れの段階が早く訪れた地域でもあります。里山はなだらかで、ゴルフ場の造成や住宅団地の開発には有利な条件となってきました。

そして、千葉県での木材生産業には、歴史的・地理的なハンディに加え、この四十年間に二つの障害が加わりました。一つ目は、マツノザイセンチュウによる、松枯れです。これでわが家の赤松も全滅、一抱えもある折れた幹の散乱は、それは悲惨なものでした。二つ目は、幹に入り込む菌による山武杉の溝腐れ病です。建築材用の杉が三十～四十年の成長のあと、幹に溝状に腐朽が入り、材木としての価値がなくなってしまうというものです。

材木価格の低迷は全国共通の第三の病です。この十年来の材木価格は、一九五〇年代の価格となってしまい、ほとんどの千葉の山の立ち木は、タダになってしまいました。伐採・搬出の経費さえ賄えない逆ザヤでは、事業になりません。ましてや五十年間の地代・育成費の回収は論外というのでは、植林の意欲はわいてきません。

再生への模索

こんななかで、活路を見いだすべく、林家の立場のみならず、県土の保全と有効な利用の道を探るためにも、担い手、利用方法の開発、森林全体を環境財とする視点等から、いくつもの試みが始められています。諸般の条件から千葉の里山では、当分の間木材生産は成立しないでしょうから、副次的といわれる機能を拡大することは重要です。

千葉県では、里山と市民、地主をつなぐ組織が「ちば里山センター」として六年前始動しました。設置の目的には、里山の活用に市民の力を導入するため、地主とのしっかりした契約を取り交わす「里山協定」や、管理を放棄した里山と、里山での体験を求める市民を結ぶ「ちば里山情報バンク」の利用促進等があります。これらを使い、企業の社会貢献の一環としての市民・行政・企業の協働が始まり、二〇〇八年度には総計百団体を目指すところまできました。同様の組織は、二〇〇八年度から全都道府県に一律に設置され、千葉県はそのさきがけとなりました。

また、千葉県では五月を里山月間として、全県下での「里山体験イベント」と、「里山シンポジウム」を開催しています。第五回の今年は六回の体験イベント、二十二のシンポジウム分科会を七市で開き、まとめの全体会を千葉市で開催しました。企画運営は基本的にすべてをボランティアの県民団体が行い、これに自治体、大学などが協力する形の「NPO立県千葉」のモデルケースでもあります。

里山の最大の担い手の「林家」は、幾世代にもわたる生業として、典型的な循環型産業を、自立した、環境負荷の小さい、持続する事業者として、生活者として携わってきた人々です。この担い手は、今まさに絶滅危惧種となってしまいました。他方では、都会での息苦しい日常から逃れ、コンピューターの仮想空間から、自然の中での体験の大切さに気づき、田舎暮らしや自然への志向が高まっています。首都圏というロケーション、多大な人口、海山の近接等、多様な「遊び」の場を提供できる千葉の利点をいかに生かすかがポイントです。

大好評の中、東京情報大学で開催された第５回里山シンポジウム

里山・里海ツーリズムのスタート

より多くの市民が里山体験に参加し、まずは里山の楽しさに触れ、里山を知ってその大切さを理解することが生き生きした里山づくりの第一歩となります。里山づくりには、社会の各般の知恵と協力と、国民の夢を実現するための広範な資金の調達を伴うバックアップが不可欠です。

二〇〇八年度から、全国の二万三千校（一学年百二十万人）の学童による農山漁村での長期宿泊体験を、今後五年間で受け入れ地を五百地域に拡大して具体化するというプロジェクトがスタートします。

これらの里山・里海ツーリズムなどの具体策が、「生き生きした里山」づくりに大きな効果をもたらすことが期待されています。元気な日本の将来は、里山の再生にかかっているのです。

（かねおや　ひろし）

特集５

里山・里海はみんなのがっこう

ＮＰＯ法人千葉自然学校　事務局長
遠藤　陽子

仲間とＮＰＯ法人を立ち上げて以来、南房総へ出かけることが多くなりました。

いったい緑の色は何色あるんだろうと鮮やかで多様な芽吹きに感動する時期を過ぎて、今、里山は命のみなぎる深緑に覆われています。その山あいには谷津田や谷戸田があり、薄緑色の稲苗が風に揺られています。

これまで何げなく見ていたこの風景が、より身近に思えるようになったきっかけは、ある農婦の「昔、谷津田は米びつだった」という一言でした。

弥生時代から営々と栽培され明治の初めまでは正租として社会経済の中心となってきた米ですが、栽培に必要な水利が整備されたのは昭和三十年代。それ以前は度重なる水害や干害になすすべもなく手をこまねいていた時代にあって、山あいの谷津田は大風が吹いても、日照りが続いても被害が少なく安定した収穫が望めたといわれます。

だから、この谷津田や谷戸田には米づくりに必要なさまざまな先人の知恵や技・仕組みが生かされています。その知恵や技・仕組みは周辺の里山とのかかわりだけでなく、遠い里海にまで及んでいます。この話を聞いて以来、谷津田や谷戸田の状態が気になり、行く先々で昔の暮らしや伝統行事などに興味がわいてきました。里山・里海と地域の人がどうかかわり、どんな地域文化を育ててきたのか知りたいと思い、またそれが別の地域で育った私の中の遠い記憶とつながっていったりして、ますます南房総に行くのが楽しみになっています。ひょっとしたらこれからの旅はこんな形かしらとも思いながら。

道の駅では、地域の食文化に出会えます。房総の郷土料理の代表「太巻き寿司」はもちろんですが、南房総では「からなます」によく出会います。そして、時には、「やーごめ」に出会うこともあります。私の記憶にあるのは、子供のころ、母に手のひらに乗せてもらって食べた薄緑色のほんのりと甘い米粒ですが、千葉のやーごめは甘いお赤飯のようなもの。もとは、田植え用に浸漬した種もみの残りを乾燥させ、もみを取り除いて炒ったもの、あるいは収穫前の水口の稲で作ったものです。やーごめは全国的に作られていますが、お赤飯のようになったものは珍しい。

こんな風に「もう少し地域に入っていろいろ知りたいな、もっと楽しみたいな」と思ったら、ぜひ、南房総の自然がっこうをのぞいてみてください。

南房総の里山・里海のがっこう

南房総には里山や里海、そして地域の歴

史文化の魅力を伝える団体が千葉自然学校とネットワークを組み、数多く活躍しています。

●里山のがっこう

鴨川の「大山千枚田保存会」が行うイベントでは、棚田の探検が面白い。ニホンアカガエルやトウキョウサンショウウオ、アカハライモリなどの両生類が住んでおり、あぜにはそれらを餌にするヘビが生息、ヘイケボタルやオニヤンマが見られます。そこから二十～三十分歩くと「鴨川陶芸館」。大山千枚田の土を使って好みの器を作ることができます。「鴨川自然学校」では、そば打ち体験や鴨川の歴史文化案内がしてもらえます。南房総市に移ると、酪農発祥の地「いきいき体験共和国」で酪農体験、廃校を宿泊施設にした自然の宿「くすの木」では、わらや竹細工、太巻き寿司体験もできます。一学年、二学年と表示された部屋に泊まると朝は遅刻の夢を見そう。予約しておけば「ネイチャースクールわくわくWADA」の案内で川遊びや花嫁街道ハイキングができます。有機農法で名高い旧三芳村の「道の駅鄙の里」では食農体験、その近くの「夢の花かん」では収穫体験のほかに苔玉づくりなどができます。自然の中でワイルドに遊びたいなら「ガンコ山」で

沖ノ島シュノーケリング　北限のサンゴが見られる

里海から里山へ、歴史をたどりながらのゆったり時間

ジセンターではさまざまな柑橘類の収穫やキャンプができます。館山の須藤牧場では、犬やロバ、ウサギも加わった須藤ファミリーの牧場暮らしが体験できます。

●里海のがっこう

まずは、館山の沖ノ島をフィールドにする「たてやま・海辺の鑑定団」の案内で無人島探検。漂着物で環境学習やシュノーケリング、シーカヤックもできます。海の環境学習では、「沖ノ島サンゴを守る会」の三瓶さんに海ホタルやサンゴについて案内してもらい、海辺を体感してほしい。もっと体を動かして体感するなら、「館山・海辺のまちづくり塾」のアクセスディンギー（小型ヨット）体験やシークロップダイビングスクールがあります。南房パラダイスや野鳥の森では海辺の自然観察もできるほか、近くでサンドスキーもできます。南房総市の岩井や千倉民宿では民宿ごとに農漁業体験ができるほか、地引網や干物づくりができます。大房岬では千葉自然学校の若いスタッフが岬の探検やトレジャーハンティングに連れて行ってくれ、エコミュージ研究会の民話を聞くことができます。

ガンコ山でツリーハウスを造る

●歴史・文化のがっこう

南房総は、古くからひらけ、阿波や紀州との交流だけでなく、アワビを通じてアメリカのモントレーとの交流、里見の歴史や「四面石塔」にうかがわれる韓国とのかかわり、赤山地下壕をはじめとする数々の戦跡があり、安房文化遺産フォーラムによって伝えられています。

このほかにも博物館や県民の森などとも連携して多様なプログラムが体験できます。

そして、これらの自然学校のネットワークを利用して、自分に合った、あるいは目的に合った体験をつないで独自のプログラムを作ることもできます。

千葉自然学校がコーディネートします

●千葉自然学校とは

今、子供も大人も、自然の中で遊んだり自然に触れる機会を失っています。もう一度、自然の中でレイチェル・カーソンの言った「センスオブワンダー」を活性化させよう！ 自然の案内人には地域の人の力を借りツリーハウス体験。ツリーハウスを造ったり木登りをしたり、童心に帰って親子で楽しめます。「道の駅富楽里」や「枇杷倶楽部」では、食農体験とともに富浦エコミュージ研究会の会員や地域のガイドを案内人に地域散策ができます。このほかに、ローズマリー公園では農業体験や草木染め、オレン

て、人も地域も元気にしよう、と二〇〇三年五月に設立されました。

千葉自然学校は単独で活動するのではなく、県内で活動している自然がっこう（体験事業者）とネットワークを組んで、地域資源と人材を生かした多様なプログラムを県内外に提供していこうと、これまで南房総を中心にネットワークづくりとプログラム開発・体験指導者の養成に努めてきました。現在五十の体験関係の事業者とネットワークを形成し、千葉自然学校に連絡を頂ければ希望に合った体験をコーディネートできる仕組みを作っています。

これまでに実施したプログラムの一部を紹介すると、

里山の手入れをすると、山野草も出てきて山は応えてくれる

●七色の冒険

黄色は千倉のオレンジセンターのオレンジの色、白は須藤牧場の牛乳…、と七色を求めて南房総冒険の旅。

●健康づくりツアー

鴨川の亀田病院で健康・運動能力チェックを受けた後、大山千枚田でスケッチや俳句で心身ともにリラックス。夜は旅館で特注の健康食、最後にもう一度病院でアドバイスを受けるというツアー。運動能力低下を実感した旅。

●提げ重パーティー

昔は、集落の集まり事があると家々で重箱に料理を詰めて持ち寄りました。だから、どこのばあちゃんの漬物がおいしいとか、あの母ちゃんの煮しめはうまいとか、みんなが知っていました。これを再現しようと大山千枚田と自然の宿「くすの木」にかかわる母さんたちが提げ重パーティーを再現しました。

百皿近い料理が集まりみんなでわいわい食べました。不思議なことにみんな味が違っていて、改めて郷土料理の魅力を実感しました。以後、注文に応じて出前もするようになっています。

究極の里山遊びは…

千葉自然学校では、南房総市平久里にかやぶきの家とその周辺の畑・竹林を借りています。

長く使われないでいた家は、屋根も傷んで外壁も補修が必要です。ここを地域の人を先生に里山暮らしが体験できる場にしたいと、地域の有志にもかかわってもらって少しずつ補修しています。竹林も整備し、畑も起こして野菜を植え始めました。自給自足しながら人と里山のかかわり方を体感したり、地域社会に溶け込むきっかけになる場を作りたいと取り組んでいます。興味のある方は、ぜひ今からご参加ください。知恵と技が必要な究極の里山のがっこうです。

（えんどう　ようこ）

返還四十周年を迎えた 小笠原にエールをおくります

財団法人日本交通公社　主任研究員
寺崎　竜雄

小笠原の観光振興にかかわるようになってから十年近くになります。この間に小笠原を訪れること、二十回を超えました。仕事とはいうものの片道二十五時間の船旅と、短くとも六日間という旅程をよくもこなしてきたものです。

行き帰りの船の中ではどこからともなく知り合いが集まり宴会となります。島の行政や商工関係者、そして諸々の使命を抱えた内地からの出張組が出入りする場が、わたしの飲み処です。出張の数が十回を超えたころの宴席で、わたしもそろそろ島民になったつもりで小笠原のことを紹介していきたいというような自己紹介をしたところ、島の方々から温かい拍手をもらいました。何度訪ねても、やはりよそ者に違いないのですが、お前はおれたちの仲間だと言われたような気がしてとてもうれしかったことを覚えています。

島のあらまし

小笠原諸島は東京からちょうど一千キロ離れた所に位置する島しょ群です。これまでに、大陸と陸続きであったことがない海洋島です。そのため、この島で発祥し進化してきた固有の動植物が多いことでも知られています。このような生態系や地形地質などは世界的にもまれで貴重なことから、世界自然遺産への登録の準備が進められています。

一般の人が生活しているのは東京からの船が寄港する父島と、そこからさらに船で約二時間半行ったところにある母島の二島で、人口は合わせて二千五百人程度です。島の産業では、振興開発関連事業の受け皿としての建設業が大きなウエートを占めています。宿泊や飲食や物販などの観光関連産業も島の中核産業です。亜熱帯気候を生かした農業や漁業などの収穫品は、地場産の食材として観光客にも人気があります。観光を中心とした商工業と農業や漁業が連携した産業振興に期待が寄せられています。

小笠原へは年間二万人弱の観光客が訪れています。来島者の主な目的は、サンゴや独特の海洋生態を見ることができるダイビング、ザトウクジラの迫力ある姿に間近で触れるホエールウオッチング、イルカと泳ぐドルフィンスイミングといった海での活動を楽しむことです。近年では固有動植物や特徴的な景観の解説を受けながら散策を楽しむ観光客も増えてきました。

このように小笠原は自然環境面での特徴を通して紹介されることが多いのですが、本稿では歴史的な面にも簡単に触れてみます。

駆け足で歴史をたどると

小笠原諸島は一五九三年、当時の信州松本藩の小笠原貞頼が発見したと伝えられ、地名の由

来ともなっています。一方で大航海時代さなかの一五四三年にはスペイン船によって発見されていたという説もあるようです。一七世紀にはオランダ船、イギリス船、ロシア船による小笠原発見の記録も残されています。

一九世紀に入ると太平洋での捕鯨が盛んになります。ハワイ諸島が北太平洋最大の捕鯨中継基地として栄えたことに着目して一八三〇年に小笠原諸島に渡ったナサニエル・セーボレーら五人の欧米人などが初の定住者となります。農業や漁業を営み、寄港した捕鯨船に新鮮な食糧や水を供給して生計を立てたといわれています。

一八五三年には開国交渉のため日本を訪れたペリーが父島に寄港しています。ペリー提督は米国から中国への航路の中継基地として小笠原を重要視していたようです。ペリー提督の『日本遠征記』により小笠原に欧米人の定住者がいることを知った江戸幕府は、長年放置した小笠原の開拓に乗り出します。しかしながら幕末期の財政難の折、幕府による開拓はわずか一年半ほどで中止となります。

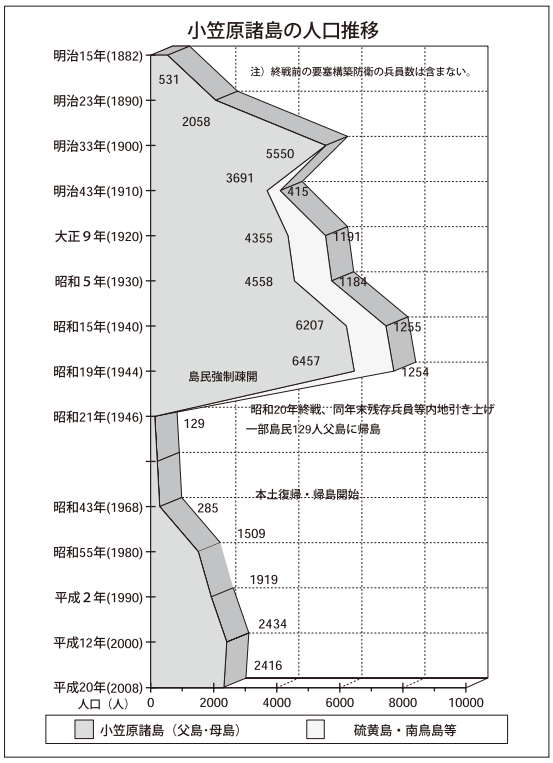
時代が改まり、明治政府は再度開拓を始めます。そして一八七六年（明治九年）、政府は各国に対して日本による統治を通知し、小笠原諸島は日本領であることが確定しました。一八八二年（明治十五年）には欧米系島民全員が帰化し、日本国籍を取得します。

その後、東京府による本格的な移民開拓が始まり、殖産興業政策のもとで開墾が奨励され耕地が急速に拡大しました。サトウキビ栽培、キュウリやトマトやカボチャなどの野菜の内地への出荷、漁業が伸び、歴史の中でも非常に活気のある時代でしたが、原生的な自然が失われていく時期でもありました。

大正時代に入ると、南洋への日本領土拡大の拠点として、また国境の要塞として、軍事的利用が始まります。昭和時代になってますます軍事施設の建設が進み、軍関係者の視察も増えて軍事色が濃くなりますが、島民の明るい暮らしは続いていたといいます。

しかし、太平洋戦争開戦後は要塞建設のための労務者や兵員が次々と来島します。硫黄島にも約千人の兵員が駐屯するようになり、飛行場も整備されました。その後の戦況の変化を受けて、一九四四年（昭和十九年）、全島民六千八百八十二人が内地に強制疎開となり、小笠原は戦争の最前線として軍事色一色に染まりました。父島に約一万五千人、母島に約六千人、硫黄島には約二万一千人の日本兵が配備されていたといわれています。

戦争終結後、日本兵は内地に復員し、小笠原は米国占領下に置かれます。そのような状況



資料：『小笠原諸島観光振興計画』（平成 12 年３月）に本年のデータを追加

下、内地に疎開していた欧米系島民だけは帰島が許され、一九四六年（昭和二十一年）には百二十九人が父島に戻りました。しかしながら、同じく内地に疎開していた旧島民の帰島は許されませんでした。

戦後二十三年を経た一九六八年（昭和四十三年）、小笠原諸島の本土復帰が実現し、ようやく念願がかなった島民の帰島が始まりました。その翌年には小笠原諸島復興特別措置法が制定され、生活基盤復興事業が推進されます。加えて一九七二年（昭和四十七年）には国立公園に指定され、貴重な自然を守るための取り組みが始まるとともに、その風光明媚な様子が広く知られていくこととなります。一九七九年（昭和五十四年）には、復興特別措置法が振興特別措置法に改称され、国による復興から村による振興へと発展がシフトします。同時に小笠原村長選と村議選が行われて小笠原村政が確立し、自立的発展に向けた取り組みがスタートしました。

返還四十周年を迎えて

小笠原の人口は、二〇〇〇年までは増え続け、その後は横ばいとなりました。温暖な気候と豊かな自然の中での暮らしにあこがれた移住者も数多くいます。

島には数多くの戦跡が残されており、戦跡を巡るガイドツアーに参加する観光客が増えています。ガイド役の島民は、戦時の事実を正確に伝えられるよう努めていると言っていました。

村役場の幹部の多くも、もともとは内地居住者で、村の職員採用試験を経て島に渡った人たちです。島の観光産業の牽引役として活躍するわたしの友人たちにも、魅力に取りつかれた人たちが多くいます。彼らは、その後島で結婚し、子供を育ててきました。

もちろん強制疎開の後に帰島を果たした人、欧米系の人たちもたくさん暮らしています。

一週間に一度しか新聞が届かず、大きな病院もない所で現代を生きるのですから、その誰もがこの島で生きていきたいという強い意志を持って暮らしているのだと思います。島に対する深い愛情と、自分の生き方への自信が、多様性を受け入れる寛容さをつくっているのだと思います。

そして、小笠原は今年の六月二十六日に返還四十周年を迎えました。誰もが一緒になって記念日を祝ったそうです。

昭和43年（返還当時）の父島のメインストリート。米軍統治の名残から芝生が植えられていたといいます。（写真は小笠原村所蔵）

島の歴史を支えるもの

一年を通して行われる四十周年記念行事を実施するにあたり、日頃から自分たちでやってみたかったことを事業募集したところ複数の提案があったそうです。そのうちのいくつかを補助事業と位置づけ、実行委員会からの補助を受けて提案者が自らイベントを実施することにしたそうです。

比較的歴史の浅い小笠原の代表的な文化的な資産は、大正末期に移入された「南洋踊り」、タコノキの葉を用いた小笠原独特の編み物「タコの葉細工」でしょう。いずれも戦争による強制疎開のため伝承は一時期途絶えますが、返還後帰島した人々により再び確立され、島の伝統文化として継承されています。

近年ではフラのサークルや、スティールパンを演奏するオーケストラ、小笠原の民謡などと笛、太鼓、鉦を組み合わせたボニン囃子が新たに誕生しました。フラサークルでは島の歌を踊ることにこだわり、今や四百人もの島民がこの活動にかかわっているそうです。

古き良きものを受け継ぎながらも、今の自分たちの島暮らしに合った新しい楽しみを創造し続けています。これらのいくつかが島民に広く浸透し、やがて独特の生活文化となっていくのでしょう。小笠原の歴史や文化は、今も島民によって更新され続けています。

締めくくり

小笠原観光の醍醐味は、そこに暮らす人たちの個性と寛容さ、そして彼らがつくる生活のリズムに入り込んだ時に感じる居心地の良さなのだと思っています（このことは、当財団のホームページ(注)でも触れています）。

観光客の多くは、各種のガイドツアーに参加して、自然を堪能するとともに、ガイド役の島民との語らいを楽しみます。そして、言葉の端々に表れる島への思いに引き込まれていきます。

資源性を強く生かした観光利用は、時に資源の劣化をもたらすことがあります。そのことを懸念して、法令などによって利用の調整を図り、資源の保全に努めようとする動きが活発になっています。小笠原ではこれらに先駆けて、観光事業にかかわる人たちが主体的に観光行動に関するルールを定め、自分たちの行動を律し、観光客の行動の誘導に努めてきました。自主ルールの数は九つになりました。

豊かな環境の中、自分のペースで自由に暮らし、生活を楽しむ権利を行使するとともに、この優れた環境を保全していくという責任を負い義務を果たそうと努力しています。まだまだ四十年の若輩と言うなかれ、立派な大人ぶりに、これまた感心です。

（てらさき　たつお）

（注）http://www.jtb.or.jp/ の研究員コラム vol. 15をご覧ください。

大正末期に欧米系島民が南洋諸島から伝えたといわれる「南洋踊り」は南洋踊り保存会によって継承されています。（写真は昨年度の返還祭の様子です）

連載Ⅰ
あの町この町
第28回

鳥の休み場――青森県・黒石市

ドイツ文学者・エッセイスト
池内 紀
（イラスト＝著者）

江戸時代は「分知」といった。分地ではなく分知。知行を分けること。大名や旗本が領地を分割相続するときに使った。土地・財産を分けるわけだが、それ以上に支配権にかかわるので土地の「地」ではなく知行の「知」をあてた。そこから「支藩」とよばれるものが生まれた。

もとより勝手に分けたりはできない。幕府に願い出て許可を得なくてはならない。どのような規準で許可・不許可を決めていたのか。いろいろ条件があっただろうが、そこにはきっと「分割しても自立できる」というのが入っていたと思われる。それだけの経済力をそなえていること。

旅行先を選ぶとき、「元支藩」というのを一つのヒントにしている。小さく、まとまりをもち、歴史がよく残っている、そんな味わい深い町が多いからだ。青森県の黒石市がその一つ。

弘前市の東、津軽平野が広大な南八甲田の山塊にうつる手前にあたる。明暦二年（一六五六）、津軽信政が弘前藩を相続するに際して、叔父信英に黒石を中心とする五千石を分知した。その後、新田開発が成功したのだろう、文化六年（一八〇九）、石高が倍になって一万石。以後、廃藩置県までつづいた。

元支藩の町がおもしろいのは、政治的なことは藩にまかせていられたせいではあるまいか。幕府の監視も本藩ほど厳しくない。江戸の藩邸に莫大な費用をかける必要がなく、知行はなるたけ領内の暮らしにあてられる。そのせいかこの手の町には造り酒屋が多く、神社の境内に能舞台がそなわっていたりするものだ。

黒石市中町は別名が「こみせ通り」。藩制時代に考案されたアーケード状の通路「こみせ」がしっかり残っている。風土に応じた知恵であって、冬の吹雪、夏の日照りに強いのだ。さらに車社会の到来とともに新しい効用が加わった。警笛におびやかされずに、ゆっくり町歩きができる。

青森→弘前→黒石と巡ってくると、町のちがいがよくわかる。県都青森市には国の出先機関がそろっていて、政治・経済都市である。弘前市は旧藩の城下町として第二の県都の役割をもち、こちらは文化・教育都市を標榜している。どちらにせよ「公務員」とよばれる人がドッサリいて、町の雰囲気がどこか業務的で、よそよそしい。何かにつけて対抗意識があるらしく、出先機関が折半したように配置されている。時間がきて明かりが消えると、どれも死んだような建物になる。

黒石にくるとガラリと変化した。弘前から一輛きりの電車にゆられてきた。なぜか一度南に下り、それから北へのぼる。そのせいで岩木山が右に見えたり、左手にうつったりした。津軽の名山をじっくり見てもらうために、わざわざ迂回するかのようだ。所要時間二十数分なのに、ここちよく旅行気分を高めてくれる。

呉服屋、材木店、仕出し屋、和菓子屋、美術品店、餅屋、自転車店……。妻入り、あるいは平入りのスタイルで、木組みに大きな屋根。洋風モルタルはモダン大正調。そのなかに、造り酒屋二つがひときわ豪壮だ。一方の銘柄が「玉垂」、もう一方は「菊乃井」。新酒ができたしるしにつるす「酒林」が小屋根の下に大きな玉をつくっていた。

どれもが町のなかの店なのだ。配送の車と店先でやりとり。用向きをすませて帰る人を見送る。電話の応待。通りの人と手まねで合図。たしかに仕事だが業務ではないのである。店によっては何代にもわたって受け継ぎ、時代に応じて工夫をかさねてきた。店先でいただいた「津軽黒石こみせ通信」が店主の顔写真つきで紹介している。

「錦石なら真土家です」

商売でも何でもないが、錦石をコレクションしている家があって、見せてもらえる。

「仕立てから直しまで」

いかにも職人風のおじさんだ。

「上原げんとの母の生家」

たしかに曲の紹介で「作曲　上原げんと」が言われていた。昭和をいろどった歌謡曲の生みの親のその「生みの母」は呉服屋の奥さまだった。

「土蔵の中でコンサート」

使われなくなった土蔵をコンサートホールとして甦らせた。名称が「こみせん」、名づけにも津軽三味線が封じこめてある。

「国の重要文化財指定の土間で珈琲」

こういった町には旧豪商の屋敷が文化財になっている。いかめしく拝観させるのではなく、「第十四代奥様がお待ち」してくださって、珈琲までいただけるとはうれしいかぎりだ。

「販売から加工まで全てを手作業で…」

若い人が指環の店を開き、ひと昔もふた昔も前の古いのを、いまのデザインにリフォームする。蔵やタンスの引き出しに宝物が眠っているようなフトコロ深い町だからこそ、思いついたアイディアではなかろうか。

明治十一年（一八七八）、一人のイギリス女性が黒石にやってきた。

「ここは人口五千五百の清潔な町で、下駄や櫛の製造で有名である」

とてもきれいな、風通しのいい二階の部屋に通された。あたりの景色がよく見える。隣家の奥の部屋、庭園で仕事をしているようすもながめられる。

「青森まで直行せずに、ここで三日二晩滞在している」

もともと北海道のアイヌ民族を知りたくて、はるばるとイギリスからやってきた。青森港出港の船で渡るのを遅らせてまで三日間も逗留したのは、ここが気に入ったせいにちがいない。だから通信の形をとった紀行記の第二十九信、第三十信、第三十一信は、すべてはじめに「黒石にて」と注記されている。

イサベラ・バードの『日本奥地紀行』は、ちょうど一三〇年前の日本を克明に描いている。東京を出たのが六月十日のこと。黒石着が八月五日。二ヵ月ちかくかかって東日本をほぼ縦断したことになる。

いいときにやってきた。青森の夏をいろどるねぷた（ねぶた）祭りは、黒石ねぷたが七月末から八月初めに先陣を切る。バードの記録は「黒石にて　八月五日」とあって、この日が祭りの最終日だったようだ。

「行列は大きな箱（というよりむしろ金箱）を持って進む」（高梨健吉訳）

祈願を書いた紙が入れてあって、それを川へ流すという。

大太鼓と小太鼓約三十をドンドコドンドコと休みなく打ち鳴らす。そのあとに無数の提燈をつけた長い竿の登場。「あらゆる種類の奇獣怪獣」を極彩色で描いた「ねぷた」がつぎつぎにやってくる。イサベラ・バードには明かりつきの透し絵のように見えた。

「あらゆる種類の珍しい形をしたもの——扇や魚、鳥、凧、太鼓などの写し絵である」

そのうしろを何百という大人や子どもたちが手に手に丸い提燈をもって歩いていく。街路の軒端はどこまでも巴のマークをつけた提燈の列。

「このように全くお伽噺の中に出てくるような光景を今まで見たことがない」

「ねぷた」といっても異国人にはわかるまいと思われたのだろう。土地の人から「七夕祭」「星夕祭（せいせき）」だと教えられた。

青森ねぶたや弘前ねぷたが観光化して、造りものが年ごとに大きく、ハデになっていったなかで、黒石ねぷたは祭礼のかたちをよくとどめている。町内や子供会の名入りの丸っこいのが、ごく人間的なスケールにとどめてある。夏の夕空が赤く染まったなかに、優雅な火の玉になったのがゆっくりとおねりをしていく。まったくそれは「お伽噺の中に出てくるような光景」というしかないのだった。

「所得倍増」をスローガンにしていた昭和三十年代が高度成長第一期だった。これを皮きりに日本中の町がいっせいに衣更えをした。格子よりもアルミサッシ、漆喰塗りの壁ではなくトタン張り、木の看板に代わりプラスチック。安っぽい新建材で安っぽい

お化粧をした。

いまにして思えば、どうしてそんなバカげたことをしたのか首をひねるのだが、流行は判断力をマヒさせるのだろう。その結果、風格ある城下町も、古くからの街道町も、「現代風」に模様替えをして、全国どこにでもある個性のない町になった。

黒石はほとんど流行にのらなかった。新素材でお色直しをするには古家がしっかりしすぎていたし、それに旧支藩的な圏外的性格から、よそと歩調を合わせにくかったのかもしれない。町の人々は自分たちが時代にとり残されたような気持がしていたのではなかろうか。

ところがどうだ、時代が大きく変化して、いまや古いものが新しい。よその町が歯がみしてくやしがるような町並みが、ここにズラリと揃っている。ほかのところは多くの予算をつけ、やっきになって町造りにとりかかっている。その当のもの、しかも風格と貫禄をそなえた極上が自分たちの町にあるではないか。あとはそれをいまの時代にどのように生かすかの知恵だけ。

おもえば黒石市は恵まれた土地にある。津軽平野にのぞみ、豊かに米がとれる。背後の南八甲田から澄んだ水が流れてくる。山あいに入ると、あちこちに温泉が湧いている。

にんにく味噌、ピーマンの佃煮、あけび味噌、ばっけ味噌、しそもろみ、すべて当地産の材料で、「黒石の大地の恵み」。

黒石銘酒はもとよりだが、酒からつくったじょんがらケーキ「地酒仕立て」。たしかにケーキだが十八歳未満はダメ。

餅米粉と砂糖をねり合わせたのが「うんぺい」。ここでは雪だるまの形をしていたのが「ゆきだるまん」。さらに酒粕を利用して「高菜の葉く

黒石ねぷた

るみ」という漬物を考案した名人がいる。二百樽にかぎっているところが名人気質というものだろう。

選別で出荷されなかったりんごを生かし、まるごと炭にしたのが「くろちゃん」で、空気の浄化・消臭効果バツグン。「黒石ブランド研究会」の説明書つきだから、町の人がグループで研究に励んでいるらしい。

浅瀬石川沿いの郊外に温湯（ぬるゆ）、落合、板留、ランプの宿 青荷と温泉がつづいている。温湯はゆるやかな窪みの底のようなところに共同浴場があって、まわりに「客舎」とよばれる宿が立ち並んでいる。四百年の歴史をもつというが、湯治の伝統を色こく伝えている。

「長方形の陥没の縁に沿って家が立っており、その底部に浴場がある」

イサベラ・バードはそんなふうに書いているから、黒石を発つ前夜に訪れたのは温湯だろう。浴場は四つあって、入口が形式的に分かれているだけで、中央の浴場で男女が混浴していた。

その名のとおり「鳥（バード）」のように自由なイギリス女性は、おめず臆せず入湯した。誰もが親切で、「私のような不本意な侵入」も気にとめない。そんな鳥の休み場で、金髪女性はまわりのおしゃべりを聞いていて、久しぶりに故国のパブを思い出した。

「大衆浴場は日本の特色の一つである」

先入観なしに話してまわった異国人が、正確な日本観察を書きとめている。

「平成の大合併」で黒石市のまわりは大きく変わった。青森市は浪岡町と合併。尾上町、平賀町、碇ヶ関村が平川市になった。藤崎町、常盤村が合併して藤崎町、弘前市が二町村と合併。そんなあわただしい変化のなかで、黒石市だけが元のまま。

市町村という行政区分はゆるやかではあれ、それぞれの土地の特色、また人口比率に対応していた。村行政は町行政

温湯温泉共同湯

とちがい、町行政は市行政とことなる性格をおびている。土地ごとの暮らしを成り立たせている条件が微妙にちがっているからだ。

旧の町役場や村役場は「支所」といった名で存続している。しかし、たいていが窓口業務にとどまって、以前のような自前のきめこまやかな行政の余地はほとんどない。江戸幕府は分割に厳しく、支藩の新設をなかなか認めなかったが、現代の霞ヶ関幕府は財政改善と効率化の名のもとに、しゃにむにくっつけて、支所をごまんとつくった。いずれ歴史がきついシッペ返しをするのではなかろうか。

温湯の宿は夏場は明け放しで、夜風が部屋を通り抜ける。湯上がりに浅瀬石川の橋の上で涼んでいた。まわりの仄明かりで川波がキラキラ光っていた。頭上の星もキラキラ光っている。

ひとしきり涼んでから宿にもどってきた。長逗留の人が庭先や縁側に洗濯物を干している。年配者が多いせいで、古風なステテコ、ちぢみのシャツ。厚ぼったいネルのシャツをぶら下げている人もいる。

食事のときの話によると、家の人たちが飼い犬をつれて、おじいさんを訪ねてきた。犬はワゴン車からとび出すなり、一目散にじいさんのいる客舎にやってきてうれしそうにシッポを振った。

「ンだ、ンだ」

まわりのおばあさんたちが、いっせいに感プクした。そのうち、なかの一人が、「においだろう」という意味のことを津軽弁で言った。じいさんのフンドシの匂いを、犬がいち早くかぎつけた。さらに大きな「ンだ、ンだ」があがって一件落着。それで思い出したが、縁側の竿にかなり使いこんだ形跡のある六尺が干してあった。

ま夜中に目がさめて湯に行く人がいるのだろう。夢うつつのなかに枕の下でカラコロという下駄の音がひびいていた。

（いけうち　おさむ）

連載Ⅱ
風土燦々①

輝ける日本人の暮らし＝序幕

ルポライター　飯田　辰彦

連載の開始にあたり、手短に筆者の来し方と企画内容の説明をさせていただく。

大学卒業後、そもそも就職したのが日本交通公社（現ＪＴＢ）だった。高校生のころから当てのない旅に出るのが好きで、大学の四年間は文字通り旅に明け暮れた。ＪＴＢを受けたのも、旅と旅行会社の漠然とした接点を感じたからにほかならない。

入社時には、運よく出版部門に配属された。創刊間もない『るるぶ』という季刊雑誌の編集部だった。三年半たったところで月刊『旅』に異動。厳しいデスクの下で、編集のイロハから鍛えられた。学生時代以来の旅の経験を企画に生かすことを覚えたのも、このころのことだった。

脂がのってきた矢先、管理部門への異動命令。そこで、わがままを通す形で、思い切ってＪＴＢを退職することにした。入社して十一年目のことだった。フリーで食べていける当てはまるでなかったが、もう一度じっくり国内の現場（地方）を歩きたいという強い思いに後押しされ、ノンフィクションのライターとしての船出を決意した。

意に反して、当初は仕事の大半が海外の取材ものだった。優に百カ国余りを渡り歩いたと思う。

しかし、後に国内のテーマを掘り下げるにあたって、この海外体験が大いに力となった。仮に、国内の小さな事象と思われるものであっても、視点（視野）を外に置くことで、まるで別の価値や意味を持つことを、目の当たりにしたからである。

国内の最初の仕事らしい仕事は、古巣ＪＴＢの月刊誌『ＹＥＳ』における「河口の町へ」という連載だった。近世・近代までの物流の要衝であった河口の町、その現在を訪ねてみようという軽い気持ちでスタートさせた企画であった。これにより、図らずも河口と源流（山間地）が直結していることに気づく。単行本『河口の町へ』の出版の後、山里三部作（『峠の村へ』『山に生きる』『有峰物語』）が続いた由縁である。

〝山〟に通い始めて程なく、そこが原日本人（縄文人）発祥の地であり、またこの国の精神文化の源泉であることを、身をもって理解することになる。だから、拙著『有峰物語』の帯には、「〝山〟を屠ることは、民族の根っこの喪失を意味する」といった勇ましいコピーまで躍っている。だが、現実には、日本文化揺籃の地であるはずの〝山〟は、すでにダム開発により取り返しのつかない状況に立ち至っていた。

猶予は許されなかった。風前のともしびの段階であるにせよ、ともかく今残る日本人の生活文化、暮らしの知恵を採集し、また記録すべく東奔西走することにした。ただ、民俗学をやる気はさらさらなかった。

記録して整理するだけでは、いつまでたっても社会とのパイプを築くことはできない。採取し、記録した生活文化が今いかなる意味を持ち、将来にどう生かせるか……。私にとっては、そこが重要だった。

もはや幼稚園の子供でも感づいている。この惑星がとうにのっぴきならない現実に直面していることを。民俗学にせよ、人類学にせよ、今それらに求められていることは、行動し、発言する学問であるべき、ということだろう。目の前の異なる変化をいち早くかぎつけ、それに鋭く反応、また対応できる行動原理が今求められている。

さて、その後の私の生ける生活文化を訪ねての旅は、寄り道と立ち往生を重ねつつ、それでも何とか燃料切れを起こさずに続いている。旅の途上で見えてきたものは、進歩という美名に惑わされず、大事な土地土地の基層文化を守る日本人のけなげな姿だった。彼らは、開発が人の心に病を巣くわせ、文明が不毛の荒野を広げることを知っていた。彼らが住む所には、いまだ風土の輝きがある。

一方、ちまたではサステイナブル（持続可能）という言葉が独り歩きをしている。残念ながら、ムードだけではこのちっぽけな惑星の未来を担保することはできない。そのとき、人智が尊ばれ、暮らしの作法が生きて伝承されている身近な風土に接することは、何よりのヒントになるだろう。つまし く、しかも輝いて暮らす人々のいるコミュニティー、の意だ。

本シリーズでは、観光地巡りの旅ではまず出会うことのない、知られざる国内の輝ける風土をタップリと紹介していきたい。「えっ、まだこんな土地が日本にあったの？」と感じていただければ、幸いである。願わくは一歩進んで、なぜそうした風土が残ったのか、またそうした風土を今後も存続させるために各自何ができるか、といった問題意識にまで高めていただけたら、と思う。

経済活動の追求とグローバリズムの蔓延は、この国土から、そしてこの惑星から風土の輝きを奪い取っていった。風土の多様さは、生命活動の健康度を測るバロメーターだ。つまり、サステイナブルなあり方を求めようとすれば、おのずと風土の多様性に行き着くに違いない。生物種である人類の生存は、風土あっての〝物種〟なのである。

次号からはルポルタージュ形式での記事となる。

（いいだ　たつひこ）

宮崎県美郷町、小丸川源流の集落・阿切で会った川野楠男さん夫婦（2008年4月撮影）

連載Ⅲ
ホスピタリティの
手触り49

旅をしない理由

旅行作家
山口 由美

海外への「あこがれ」が消滅…

若い人が、旅、それも特に海外旅行をしなくなったといわれて久しい。一昔前は、どこの観光局もホテルも、いかに「若い女性」を誘致するかを考えていたのに、最近では、彼らの興味の対象は、すっかり、唯一、積極的に海外旅行をする市場である「熟年層」にシフトしてしまった感がある。

若い人が海外旅行をしない理由は何なのだろう。ある新聞の記事では、今はネットで何でも海外の情報が得られ、バーチャル体験ができるから、などと理由づけしていたが、本当にそうだろうか。

格差社会で収入が減っているから海外旅行に充てる費用がないという意見もある。だが、円高のバブル時代はさておき、少なくともそれ以前と比べれば、物価に対する航空券の価格は、原油高によるサーチャージをプラスしても安くなっている。海外へ行くお金がないというよりは、使い道の優先順位から海外旅行が外れてしまったと言うべきだろう。

若い人が海外旅行をしない最大の理由は、海外に対する「あこがれ」が消滅してしまったからではないかと私は思う。

その昔は、パスポートを取って飛行機に乗る、それだけでわくわくする、言い知れぬ高揚感が海外旅行にはあった。昔のガイドブックをひもといてみると、例えば四十年前、海外への航空券は、今よりも高額だったことが分かる。当時の物価を考えれば、大変な割高感である。でも、だからこそと言うべきか、人々は、一生に一回は海外に行きたいとあこがれ、貯蓄に励んで海外を目指した。そして、その熱気と円高や景気の波に後押しされる形で、海外旅行ブームは到来したのだった。だが、大衆化された海外旅行は、いつしか輝きを失ってしまったのかもしれない。

そして、もうひとつの理由が「面倒くさい」ということなのではないか。考えてみれば、旅というのは、そもそも大変に「面倒くさい」ものである。海外旅行といえば、それに輪がかかる。手配は旅行会社に任せたとしても、身の回りの支度を整えて目的地まで移動する行為は、誰も代わってくれない。

特に9・11以降、空港の警備が厳しくなり、海外旅行は一段と煩わしくなった。使い慣れた化粧品をスーツケースに入れるのか、手荷物に入れるのか（ご存じのように今は機内への液体物の持ち込みが制限され

ている)、思い悩むだけで「面倒くさい」。でも、それでも行きたいと思うのが旅の魅力であり、それ自体をも楽しんでしまうのが、旅の極意なのだが、結局、「面倒くさい」に「憧れ」が負けてしまっているのだろう。

海外旅行ブームというのは、経済成長の一過程で、祝祭のごとく通り過ぎるものなのだろうか。今、どこに行ってもパワー全開で楽しそうに旅をしている中国人や韓国人のグループを見ると、過ぎ去った日本のある時代を見るようで、ふとそんなことを考えてしまう。だが、一方で時代は、さらなるグローバリズムへ向かっており、国と国の間を結ぶ航空輸送の絶対量は拡大している。

アンコールワットを観光する中国、韓国からの旅行者

日本人は、先進国の中で、若い人が海外に就職先を選ぶ率が非常に低いという新聞記事を読んだことがある。祝祭のごとき海外旅行ブームの後は、本来、そういう方向に進むべきなのだと思う。すなわち、遊ぶのも学ぶのも仕事をするのも、そこが自国であるか、そうでないかなどは二の次で、やりたいことができる場所に行く柔軟さである。とかく日本人は、それに「国際感覚」などという仰々しい表現をするが、そうやって特別視すること自体、進むべき次のステージに行き着けていないことを物語っている気がする。

海外を旅していると、「私は日本人だ」と言っているのに、「それで、どこの国に住んでいるの?」と聞かれることがよくある。そう質問されて戸惑う日本人の感覚こそが、新聞記事の数字が示す、本当の「国際感覚」の欠如なのだと思う。

お膳立てされた海外旅行で何が分かるのか、という声もあるかもしれない。でも、バーチャルでない現実の異国に立つことは、それがどんな形の旅であっても意味を持つ。やはり新聞に、十代の男性のこんな投書があった。何かの褒賞で彼はロシアに行く機会があったという。当初、決して乗り気ではなく「面倒くさい」と思っていたのだが、帰国してみて、これまで文句ばかり言っていた日本の国が急に輝いて見えたというのだ。

今、日本という国を取り巻いている、言いようのない閉塞感と自信喪失。海外旅行は、それらに対する処方せんにもなるのではないか。

だが、その動機づけは、たぶんもう昔と同じ感覚の「あこがれ」ではない。エッフェル塔や自由の女神で記念写真を撮ってきても、誰も「すごい」とも「うらやましい」とも言ってはくれないだろう。それでも「面倒くさい」思いをして旅をする理由。ケータイやパソコンに投入する資金を旅に回す理由。それを見つけなければいけない。海外旅行というだけで、「あこがれ」というブランドが漏れなくついてきた時代は終わったのである。

(やまぐち　ゆみ)

旅の図書館

新着図書紹介

〝温泉〟。魅力的な言葉である。日本人ならこの言葉を聞いただけで、熱いお湯にざぶ～んと浸かる感触がよみがえり心と体が和んでくる。日本人は本当に温泉好きで、九割近くの人が「温泉好き」と答えている。旅行目的も毎年「温泉旅行」がトップである。にもかかわらず、「温泉地や温泉旅館が苦しんでいるのはなぜ？」。こんな素朴な疑問がこの本の出発点だと筆者は言う。さらに、「なぜ元気な温泉地と、そうでないところがあるのか？」、「旅行市場の構造的変化が問題ならば、どこの温泉地も同じように苦しいはず。「元気で前向きな温泉地の活力はどこから沸いてきているのか」知りたい！　素朴な疑問や知りたい欲求を抱えて全国の温泉地やリーダーたちを訪ね歩いてまとめた本が、**『温泉地再生』（久保田美穂子著、学芸出版社）**。

好奇心旺盛で感性豊かな著者は、調査データの分析より、そこにかかわる人に着目して解決策を探ろうとしていく。地域で頑張る人々を、共感を交えて丁寧に描き出して伝えようとする書き手の姿勢が、この本を読み物としても面白くしている。

この本は三部構成になっていて、一章では、全国から十一カ所の面白い温泉地を選び、何が元気の源かを探っている。なぜ地域に活気があるのか、そこに至るプロセスを調べることで、新しい動きが起きるメカニズムに迫ろうとしている。

各事例は、以前に『ＪＴＢ旅ホ連ニュース』に掲載されたものを書き直したものであるが、十一カ所を並べて読んでみると、元気な温泉地の共通項が見えてきて面白い。例えば、都市圏から戻った若者たちが業種を超えて酒を飲み、話し合ったことがきっかけとなった事例がいくつもある。取りあえず始めた清掃活動が広がっていった事例もある。それぞれの物語は、温泉地の小さな〝プロジェクトX〟版のようで、当事者たちの苦労や達成感が生き生きと伝わり、地域再生のストーリーとしても面白いので思わず読み進んでしまう。

二章では、全国の温泉地で活躍する七人のリーダーに会い、これからの温泉地の方向性について話を聞いている。といっても、話題は温泉地のことだけでなく多岐にわたり、観光とは何か、人間のやる気の出し方、夢の実現の仕方など、内容は幅広い。読んでみるとリーダーそれぞれの考え方や生きざまが分かり感心したり感動したりであるが、ここでも共通する言葉や考え方が出てきて驚かされる。

三章は、これらの取材をもとに、改めて最初の素朴な疑問に正面から取り組んでいる。

まず説き起こしているのは、「温泉」や「温泉旅行」の持っている意味が変化していること。その考察から、温泉地には日帰り温泉施設とは異なる価値軸の提案が必要だという。また、最新のオピニオンリーダー調査から、温泉地や温泉旅館にとって追い風となる、お客の志向や価値の変化にも言及し、温泉地に熱いエールを送っている。

最後は、具体的に地域の人が温泉地再生を目指すためのヒントをいろいろな角度から提示している。ただ観光客数を回復させようとするのではなく、まずは観光の原点に返り、そこから改めて考えることの大切さが示されている。どうすれば地域の誇りを取り戻すことができ、旅行者に行きたいという憧れを持たせられるのか。筆者は、それには地域文化が重要な役割を果たすと言う。さらに、理屈と感情の両面からのアプローチが大切であり、そのためにも温泉地の空間的な特徴を把握し、その回復に努めることが必要になる。

温泉地それぞれが、その存在する現在的意義、すなわち温泉地は人々の生活の質（ＱＯＬ）向上に役立つという積極的な価値を見いだせれば、温泉地は今以上になくてはならない存在になる、というのが筆者の出した結論である。

温泉地や観光についての課題を羅列した分析本ではなく、温泉地にかかわる実践家が行動を起こせるような実用的なヒントや知恵が詰まった本である。温泉地だけでなく、広く観光や地域づくりに携わる人にも役立つ内容で、研究者や学生の事例研究としてもぜひ読んでもらいたい一冊である。

（英）

Ａ５判　208ページ
定価　2100円
学芸出版社

財団法人　日本交通公社　出版物のご案内

■定期刊行物

●**旅行年報**（年更新、毎年九月発行）
過去一年間の旅行に関する動向と展望をデータ中心に解説。

●**旅行の見通し**（年更新、毎年一月発行）
今年一年間の国内旅行・海外旅行などの量的見通しと質的変化。

●**旅行者動向**（年更新、毎年七月発行）
国内・海外旅行者の意識と行動について実施する当財団「旅行者動向調査」の分析結果をビジュアルに解説。「二〇〇七」では、「いまどき若者の旅行マーケット」「『旅行大好き』を探る」を特集。

●**観光文化**（年六回、奇数月二十日発行）
旅や観光の文化に関する当財団の機関紙。

●**Market Insight（日本人海外旅行市場の動向）**
（年更新、毎年七月発行）
日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。当財団独自調査。〇六年より発行。

『旅の図書館』開設30周年記念講演のご案内

―“テーマのある旅”を楽しむ―

●日時 2008年10月4日（土）
●午後 2時より5時
（1時30分より受付開始）
●場所 ホテルサンルートプラザ新宿
〒151-0053 渋谷区代々木2-3-1
TEL：03-3375-3211
JR新宿駅南口より徒歩3分

講師
山口由美さん

講師
池内 紀さん

当財団の観光文化振興事業の柱であります「旅の図書館」が本年10月に開設30周年を迎えるにあたり記念講演会を開催させていただきます。講師として本誌に連載ご執筆中の山口由美さんと池内紀さんをお招きします。当日は2部構成としてそれぞれ『だから世界の旅は面白い』、『旅する心』と題して旅の魅力・醍醐味、旅する時の心がけ、工夫などを大いに語っていただきます。ご参加申し込みお待ちしています。

参加問い合わせ先　財団法人日本交通公社　旅の図書館
TEL：03-3214-6051

次号予告

●本年十月一日に『観光庁』が発足します。次号では、「ツーリズム新時代」と題し、観光創造に向けた新たな取り組みや動きを紹介し、今後の交流人口拡大の可能性を展望します。

調査研究だより

●平成二十年度より、農林水産省、総務省、文部科学省では、全国の小学生が農山漁村で一週間程度の自然体験・集団宿泊体験活動を行う「子ども農山漁村交流プロジェクト」を推進しています。教育分野では学ぶ意欲や思いやりの心、規範意識などを育み、子供の成長を支える活動として、また、高齢化や過疎化が進む農山漁村では、子供たちとの交流やふれあいを通した活力ある地域づくりへの起爆剤として、大きな期待が持たれています。

●去る五月には、都内で「子ども農山漁村交流プロジェクト発足記念シンポジウム」が、全国各地より七百人を超える参加者を集めて盛大に開催されました。同プロジェクトへの期待の高さがうかがえます。

●当財団は、平成十九年度に農林水産省の委託を受けて、「農山漁村における宿泊体験活動受入のための手引き」を作成いたしました。学校側の要望を把握するとともに、農山漁村に必要な具体的かつ詳細なノウハウを、先進事例をもとに取りまとめたものです。

●当財団では、今後とも、同プロジェクトをはじめとして、観光・交流による農山漁村の活性化に取り組む国、自治体等を支援してまいります。（吉澤）

編集後記

◆日本の原風景を代表する里山に熱い注目が注がれています。五月に東京情報大学で開催された第五回里山フェスティバル「里山シンポジウム」は『里山と生命（いのち）のにぎわい』をテーマに開催されました。開催趣旨〝豊かな里山を子供たちの未来につなげるため、命のにぎわい（生物多様性）の視点〟から里山の価値、現状と課題解決に向けた対策などが討議されました。里山に対する関心の高まりもあって、主催者予想をはるかに上回る四百五十人の方が参加しました。里山はまさに人手によって長年にわたり育まれた〝人と自然の共生の場〟であり、ケビンさんの主張されるごとく世界に誇れる観光資源だと思慮します。豊かな里山に恵まれ、日本の表玄関・成田国際空港を有する千葉県が率先して里山の保全活用と観光振興に県民を挙げて取り組まれていることは誠に意義深いと存じます。今後のますますの発展を願ってやみません。

◆新連載『風土燦々』が始まりました。次号から熱血ルポが紹介されます。今後の展開にご期待ください。

◆前号四ページの写真キャプションに誤植がありました。〈『瀬戸内海写生一週』に紹介されている画家たち〉が正当です。訂正し、お詫び申し上げます。（宇八）

観光文化　第190号

第32巻4号通巻第190号

発行日 2008年7月20日

●

発行所：財団法人　日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第1鉄鋼ビル
〒100-0005　☎03-5208-4701
http://www.jtb.or.jp

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第2鉄鋼ビル　旅の図書館内
〒100-0005　☎03-3214-6051
http://www.jtb.or.jp/library/

編集人：外川宇八

発行人：新倉武一

●

印刷所：ＪＴＢ印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554